

5 北米大西洋岸底びき網試験操業報告書(開闢丸)(昭和42年度)

(海外トロール漁業協会刊・73頁、による*)

佐藤 芳 三 (日本水産株式会社)

新漁場開発調査委員会が当協会内に設けられ、先づ1967年4、5、6月北米大西洋岸(北米フロリダ半島沖合〜ジョージェスバンク付近、北緯27°~45°)を2,500トン型トロール船開闢丸(日水)で調査した。

4月20日ラスパルマス出港、6月29日入港の49日間424回曳網(1回90分平均30~120分曳)、総漁獲844トン(商品価値677トン)、総生産55,456C/K、(1C/K入量10.5Kg)漁獲物レッド・シュリンプ(Royal red shrimp)348Kg、こいち(Atlantic Croaker)10,550、スポット(Spot)32,550、しず(Butter fish)166,673、さば(Mackerel)46,005、たい(Snapper)62,850、あかふか(Brown Shark)45,830、ロブスター(American lobster)7,510、にしん(Herring, Menhaden)46,420、かれい(Fluke Yellowtail.F)23,770、たら(Atlantic Cod)7,740、ハドック(Haddock)13,560、ポラック(Pollack)9,300、メル(Hake)(Silver, White, Southern)43,843、にぎす41,310、ローズ・フィッシュ(Rose fish又はOcean perch)21,870、その他95,695、計677,024Kg、その他は、あかまつだい(Red snapper)、あかいさき、あかめいさき、銀だい(Scup)、角頭だい(Sheeps head)、金目だい(Short big-eye)、かつお(Skipjack)、ひらめ(Flounder)、あまだい(Tile fish)、かます(Barracudas)、しゆもくざめ(Hammerhead shark)、しろざめ(Great white shark)、尾ながざめ(Tresher shark)、にべ(Weak fish)、まがれい(Dab)、いさき(Gray Snapper)、カスク(Cusk)、オーシャンパウト(Ocean pout)、プレイス(Plaice)、おひょう(Halibut)、ぶり(Yellowtail)、あかばな(Blue runner)、あら(Groupers)、沖さわら(Spanish mackerel)。

調査経過概要

当海区(フロリダ沖〜ノヴァスコシア沖)は、大陸棚100m深まで緩傾斜で、100~120m深急傾斜し、500mまでつづく。100~130m深に峡谷状の切りこみが諸所にみられる。

(1) フロリダ東岸~32°30'N

5月2日28°01.5'N・80°03.8'W(46m深)から投網、この付近40~50mはアジ、サバ、イワシ等多獲性魚のほかには有用魚種としてはアサヒエビ(赤紋エビ)の気配若干程度で好漁場とはいえない。深みの300~350m深では松イカ、メル、まじりでロイヤル・レッド・シュリンプ漁獲したが、ガルフストリームの北上強く(3.5~4ノット)曳網困難で1網最高25Kg(平均14Kg)生産にすぎない。ケープ、カナベル沖しず(小型)、こいち、スポット混

* 佐藤氏の希望により協会より入手せる上記報告書に基き宇田抄録により代えた。

合漁場、チャールストン沖あかまつ、あら、たい(5月13-15日60トン漁)、あかいさきとれた。

フロリダ東岸~ケープ・ハツテラス(28°30'N~34°00'N)

- ① しず、スポット、こいち漁場(5月4-8日34回操業)水深110-130m特に120m深(底水温14.6~19.0°C)でまとまった漁 29°13'~30°00'Nの南北45裡にみられた。29°N、以南及び150m以深では、特に300m以深ではメル(シルバー・ヘーク)、えい等だけ。

また水深50m以浅の西側、及び30°N以北にかけては、かわはぎ、いさき、しまいさきが大量に漁獲される。浅所にカクハギは無尽蔵ですてるに困ったほどである。

- ② タイ漁場(30°30'~34°00'N)

5月9~18日、操業93回、タイの中心漁場は32°57'N、78°01'Wを中心にして水深80m前後、長さ7~8裡の非常に幅の狭い水域に漁場が形成されている。海底はやや起伏はげしく粘土状大型(1トン近いもある)海綿が密集していた。この中心漁場タイ漁獲は1網最高8トン程度をみたが操業2日で急減した。(中型以北80%、中小~大芝20%)。

- (2) ケープ・ハツテラス~ケープ・メイ沖

しず漁場(36°40'~39°00'N)5月19日~6月6日169回5月20日ケープ・ハツテラスをかわしてからは気温・水温共に急激に下降し、気象も険悪となったが36°N線の浅み、水深30~40m、付近は南からの暖水と北からの寒水との汐界とみられ、たまたま赤フカの群を当てた。しかし溜りの群のよう漁獲は持続しなかった。ケープ・チャールス沖、即ち37°N線に至り、水深90m付近にて、肥満度のよい中型シズがとれ始め、39°20'N線までの水深80~150mの範囲はシズの好漁場となった。特に上昇流のある海底谷水帯に沿って索餌回遊(胃内容物カラヌス、クラゲ)し、雌雄ともかなり成熟していた。同漁場1網最高5トン程度つづいたことあり(底水温10~6°C)、隣り合せて70~90m深に帯状にサバ、マツイカが群棲していた。陸側の浅み(30~60m深)にはニシン、カレイ類(アサバガレイ、キアサバガレイ、ヒラメ)が多く、これらは110m深を中心とするシズ漁場では稀にしかみられなかった。シズと同じ網にロプスターが毎網30~200Kg混獲されたが、大どりはない。この海区では36°03'N、75°12'W付近(30~35m深)で寒暖両流の湖境に産卵直前の雌フカ2日間50トンを漁獲した。

- (3) ニューヨーク沖(40°00'~41°00'N 74°00'~69°00'W) カレイ、ニシン漁場(6月7~10日、35回操業)

黄アサバガレイ、アサバガレイが主で水深40~70m中心に漁獲、ロング・アイランド沿いの水深50~60m、ジョージエス・バンクの西側付近まで広く分布する。

ニシン類(Atlantic herring 日本型ニシン menhaden コノシロ型ニシン、Shad、Alewife ヒラに似る Pilchard)は上記カレイ類漁場と同じ所で漁獲された。40°N 69°30'W 付近でソ連大船団と遭遇、曳網敢行、小型メル(Silver hake)、ニシン

類、若干のロブスターのみ。

- (4) ジョージエス・バンク～エメラルド・バンク(ノヴァスコシア沖)タラ類、ニギス、ローズフィッシュ漁場。6月11～19日72回操業。ジョージエス・バンク縁辺はニシンのほか、北方系の魚種(クラ、ポラック、ハドック)であり、バンクの北側水深200m前後の海域でまとまった量のニギスを漁獲したが、全般に岩石、フジツボ等海底荒く、思ったほど成果上らなかった。65W線あたりのノヴァスコシア沖まで東進してはじめて、ローズ・フィッシュ(オーシャン・バーチ)がみえ出したが小型で価値少い。さらに東進してエメラルド・バンク付近ではやや大型のローズ・フィッシュ(体長30cm、体重450Kg)を漁獲した。

結局、南のフロリダ沖ではRoyal red Shrimpを主対象にしたが、ガルフストリームが強く、逆流では曳網できず、順流曳網するのみで、漁少く、その北方はシズ、タイ漁場で、タイはメキシコ湾、カリブ海に分布するものの北限に近く、移動するらしい。余り多くは望めない。赤イサキ、アラ、ブリ、ヒラマサなど30°～35°Nには多種多様な魚類はとれるが、量的には少ない。Cape Hatterasから北は水温・気温急に低下し、シケ多くなるが、以南の赤など濃厚原色サンゴ類あり、岸近にはカワハギやイワシの大群あるが潮流の速いのに対し、以北は色彩一変し、魚の種類は少いが量的に大へん多くなり、ことに40°～45°Nではエメラルド・バンク付近などローズ・フィッシュがあり、ニギス多獲され、50m以浅にカレイ類、ニシン類、ハドック、マダラ、ヘイクもとれ、海底は曳網しやすい。シズも多獲されたが、毎年出るか、夏場だけの回遊か、問題である。ロブスター、帆立貝はかなり居るが、米国漁船50～100トン級が専業にとっている。大挙出漁は問題である。北部のハドック、コッド、ポラック、ローズ・フィッシュなど対象に出漁が妥当とも考えられる。ローズフィッシュはアラスカメヌケのRedfishに似ているが赤色大へん鮮やかで、肉質良好、味も大へんよい。

6 大陸棚・大陸斜面と資源開発

星野通平(東海大学)

- 1 いま、海底鉱物資源の開発がしきりととりざたされ、底魚新漁場の発見がところみられている。ところで、鉱物資源の開発にしても、漁場の発見にしても、まず土台となるのは、海底についての科学的な資料である。このことは、水産についていえば、北洋の鮭鱒、南極洋の鯨などに関連して、関係の方がたは、すでにいくたびか経験されていることだろう。

先年、モスコウの全ソ漁業海洋研究所をおとずれたとき、その一部門をなす地質研究室に案内された。ゲルシヤノビッチ氏を長とするそこは、最新の計器をそなえ、世界のいたるところの底魚漁場の海底地形・海底堆積物の、おびただしい業績を発表していた。

わが国のいかなる水産研究所にも、このような研究部門があることをきかない。ただ、とれるところでとる、という底魚漁業であったら、その将来に、いささか危惧の念をいだかざるをえないのである。神様にお願いごとをするにも、まず、賽銭をあげるのが世の常である。ものには順序がある。底魚業界の発展のために、わが国の海底研究体制の充実を識者にうったえたいのであ